

# 素材の マエストロ

文 ソフィア・ニューリ  
写真 カルメン・コロンボ

ファッションデザイナーのロベルト・カプッチは、そのキャリアの最初期から、自身の作品に人々の注目を引き寄せる術を心得ていた。ドレープやシルエット、そして色彩を巧みに使いこなす彼の先見性溢れる創作は、既成概念を超越している。常に高い評価を博してきた象徴的な作品群には、生地の特徴を存分に生かした、カプッチならではの手法が、ちりばめられている。





「着飾ることは儀式であり、魔法の行為なの  
です」と、ロベルト・カプッチは断言する。この  
芸術家でもあるデザイナーは、1950年のデ  
ビュー以来、ファッション界に革命をもたらし、  
崇拜されてきた。「できることなら、『ファッ  
ション』という言葉は排除したいのです」と彼  
は言う。「流行を追うこと自体、すでに時代選  
れ」と考える彼が創り出す、扇子や花びら、ま  
た翼や巻物を思わせる幻想的な衣装は、確か  
にファッションを超越した存在だ。

を自らに許してきた。「大切なのは、自分の本  
質に忠実であることです。あらゆる産業と職種  
に、多くの優れた知性と素晴らしい人々が必要  
です。それが叶って初めて、美の炎が感じ取  
れるのです」と、彼は強く主張する。

スペインのファッションデザイナー、クリスト  
バル・パレンシアガと同様に、カプッチは不世出  
の建築家的クチュリエである。イギリスの写真  
家セルピートンが1954年に著した『ファッ  
ションの鏡』のなかでパレンシアガについて述  
べたことが、そのままカプッチにも当てはまる。

つまり、「いかなる集団にも属さず、誰の顔色  
もつかわず自分の意志を貫き、自身やその  
才能を商業化することを断固として拒み、季  
節ごとのスタイルの変化にほとんど関心を示

すことなく、独自の価値の創造を追求し、現  
代ファッションに精通した人々や、その類まれ  
な才能を見抜くことができる人々から尊敬と  
称賛、そして支持を集めている」のだ。

ロベルト・カプッチは1930年12月2日、イ  
タリアのローマで生まれた。ローマ美術アカデ  
ミーで学び、卒業後、彼の初期のスケッチを見  
たイタリアのジャーナリスト、マリア・フォスキ  
ニに勧められ、1950年、カプッチは弱冠20歳  
でローマのシステイナ通りにアトリエを構える。

翌1951年7月、カプッチは、ジョヴァンニ・  
バッティスタ・ジョルジニが主催するイタリ  
ア・ハイファッション・ショーに参加し、国際デ  
ビューを果たす。ジョルジニが主導した、イ  
タリアのファッションハウスの紹介は、この国

独自のスタイルを確立し、それを世界中のバイ  
ヤーやメディアに広く周知するうえで重要な  
役割を果たした。カプッチは若過ぎて、このイ  
ベントに公式に参加することはできなかったが  
（実際、その若さはスキャンダルになりかねず、  
ほかのクチュリエの参加にも影響を及ぼす恐  
れがあった）、ジョルジニの妻と娘たちが着  
るドレスをデザインする機会を与えられ、それ  
らは大きな注目を集めることになる。「その反  
響は爆発的でした……。それは、全く思いも  
しなかったことで……。私にとって初めての  
大きな成功となり、熱烈な記事が書かれ、アメ  
カの（高級）デパートから注文が殺到したの  
です」と打ち明けている。

1952年以降、カプッチはフィレンツェのピッ

【前見開きページ】  
ドレス「ブーゲンビリア  
(Bougainvillea) (1989年  
制作)。フリーズ加工を施した  
シルクタフタによる渦巻き  
の造形が、作品名となった花  
のごとく、体を包んで咲き誇る。  
【当ページ】  
(上) 1987年に制作された  
無題のドレス。フリーズ加工の  
シルクタフタで縦縞を模した  
フリルは、ビスコース  
ベルベットのスカートと一体に  
なっている。  
(下) 1995年のヴェネツィア・  
ビエンナーレは、いち早く  
カプッチを芸術家として認識  
した。彼は同展に招待された  
初のクチュリエだ。「碧玉  
(Diaspro)」は、この美術展の  
ためにデザインされた作品で、  
ビスコースベルベットと  
玉虫色に輝くシルクタフタで  
つくられている。  
【次ページ】  
渡り鳥の色彩と動きに着想を  
得た「扇 (Ventagli) (1980年  
制作)。両側に施されたシルク  
タフタの扇状の装飾は、  
着用者の手で開閉できる。

WITH THANKS TO VILLA MANNIN / ERPAC AND REGIONE AUTONOMA FRIULI VENEZIA GIULIA

ティ宮殿で開催されるファッション・ショーの正式な参加者となった。初期のデザインには、実験への情熱と幾何学的な形状や複雑な量感への嗜好が見て取れる。1951年から1956年にかけてのコレクションは、ピュアなラインとコントラストを付けたニュアンスカラーの使い方が際立っていたが、1956年以降はプリーツやドレープ、折目の幾何学的な効果といった装飾的なモチーフを取り入れ、ますます複雑なフォルムを追求するようになる。

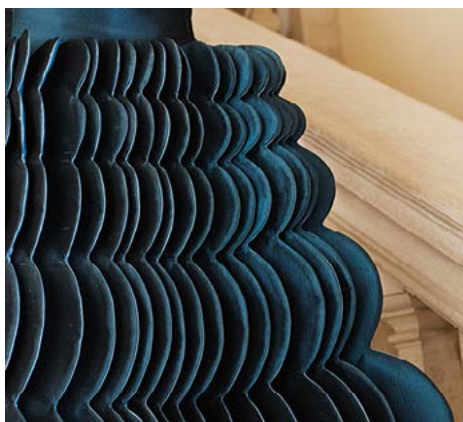
カプッチは、各デザインにおいて、芸術作品や音楽、自然界のあらゆる形から着想を得ている。100着から150着のコレクションの場合、最初に描くスケッチは800枚から時には1000枚にも及ぶが、それらはインスピレーションが呼び起こすイメージや感情から生まれる。スケッチが完成すると、裁断士たちが試作品を作成する。カプッチはこの段階で色を考え始める。縦糸と横糸を対照的な色合いにしたり、同系色でも数百種類の明暗を使い分けたりすることで、思いがけない組み合わせをもたらすのだ。

彼が生み出す夢想的なシルクの彫刻は、ノーベル賞受賞者のリタ・レーヴィ・モンタルチーニから、グロリア・スワソン、エスター・ウィリアムズといった映画スターまで、多くの女性を包み込んできた。ウィリアムズのためにデザインした、彼の代表作のひとつ「9枚のスカート (Nine Gonne)」(写真36ページ)は、9層の非対称なティアードスカートからなるドレスで、「水面に投げ込まれた小石がつくる同心円」から着想を得たという。カプッチのもうひとつの代表作、「ボックスライン (Intra a Scada)」(1958年制作)のシルエットも彼の獨創性を表している。カプッチは、当時流行していたフェミニンなジョリー・マダム(素敵な奥様)風のスタイルとは対照的なこのフォルムで、アメリカ、ボストンの老舗百貨店主催の賞を受賞している。この作品についてカプッチは、「ある種ラファエル前派の新しいファッションの概念をシンプルで手縫いで表現し、洗練されたものや人工的なものを一切排除した、ノー



カプッチは何ものにもとらわれることなく、自由にデザインする贅沢を自らに許した。

(上) プリーツ加工のシルクタフタのドレス (1985年制作)。  
(下、左から右へ) 起業家、ジョヴァンニ・パツチスタ・ジョルジーニ創設のイタリア・ハイファッション・ショーの50周年記念「ジョルジーニへのオマージュ (Omaggio a Giorgini)」(2001年制作)／見る角度によって色が変化するドレスのスカート(1992年制作)。光沢のあるシルクタフタ製「線 (Linee)」(2007年制作)。ヘリンボーン柄に重ねた色彩豊かなシルクタフタのなかでもピンクの色みが際立っている。



「オセアニア (Oceano)」は1998年の作品。イタリア外務省の依頼で、「海、未来への遺産」をテーマにリスボンで開催された国際博覧会のために制作した。柔らかなグラデーションは、日光の下では白く見え、遠くからは暗く見える海の多様な色合いに着想を得たという。



1956年制作「9枚のスカート」は、カーマインレッドのシルクタフタで造形された細身のドレス。層状に重ねられたスカートは、水面に投げ込まれた小石がつくる同心円状の波紋から着想を得ている。

メイクのモデルに着せました」と解説している。

1961年、カプッチはパリに進出することを決める。イタリアのジャーナリスト、オリアーナ・アラッチは「レウロペオ」誌で、ローマを去るカプッチのことを「ハサミを持った裏切り者」と呼んだ。しかし、カプッチはこうした批判にもひるまなかった。居を移した彼は、蓄光素材を使った光るロザリオや、透明なプラスチックで覆われ、ブレキシガラスで装飾された未来的な衣装など、新たな素材を用いた実験的な作品に取り組んだ。

1968年、カプッチはパリのアトリエを閉じ、ローマに戻る。そんな時、イタリアの映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニから、映画「テオレマ」に出演するシルヴァーナ・マンガノの衣装

デザインの依頼が舞い込み、カプッチはこの仕事に没頭した。「彼女に衣装を着せるのは素晴らしい体験でした。生まれ持った気品があって、どんなに難しい服でも、こともなげに着こなしてしまうのです」。

1970年代に入ると、カプッチはロープやラファイア、麦わらといった一風変わった素材を使って実験を続けた。1982年には、さらなる自由を求めて、ファッション業界から距離を置くことを決意する。何ものにもとらわれることなく自由にデザインする贅沢を自らに許し、芸術性の探求に没頭し、成功より創造性を優先させた。その結果、彼の作品はますます夢のような幻想的なものになっていった。この時期から以後40年以上にわたり、カプッチは舞

台衣装の制作にも関わっており、1986年にヴェローナで上演されたベッリーニの「ノルマ」に登場する12人の巫女や、2020年にジェノヴァで上演されたダニエレ・チブリアーニ企画・監修の舞台「プロメテウスの創造物、カプッチの創造物」で、変容する主人公たちの衣装デザイナーなど手がけている。

1995年、ヴェネツィア・ビエンナーレの100周年を記念して、当時の展覧会ディレクター、ジャン・クレールは、この歴史的イベントに新たなアーティストと表現手法を取り入れるべく、カプッチに白羽の矢を立てた。「多様な創造形態の間に、もはやヒエラルキーは存在しない」とクレールは宣言し、「ファッションは当然、視覚芸術に属する」と明言した。これに

呼応して、カプッチは天然鉱物から着想を得た12点の布の彫刻を制作（写真32ページ）。彼が真の芸術家として認められた瞬間だった。

1990年代以来、カプッチの彫刻的な衣装は、オーストリアはウィーンの美術史美術館から、イタリアはバルマのファルネーゼ劇場、そしてアメリカのフィラデルフィア美術館に至るまで、世界有数の美術館に展示されてきた。現在、カプッチの作品は、イタリア、ウーディネにあるロベルト・カプッチ財団で甥のエンリコ・ミニオによって保存され、時代と流行を超えた比類なき創造物として今もなお輝き続けている。

オーナーエリアマカジン・エキストロにて、この記事の関連コンテンツを掲載しています。Ortからぜひご覧ください。patek.com/owners

